

質問：

開祖の教え研究についてです。

今朝方、ハワイの Christopher Li 先生（合気道 三元会）から、以下の資料を紹介して頂きました。

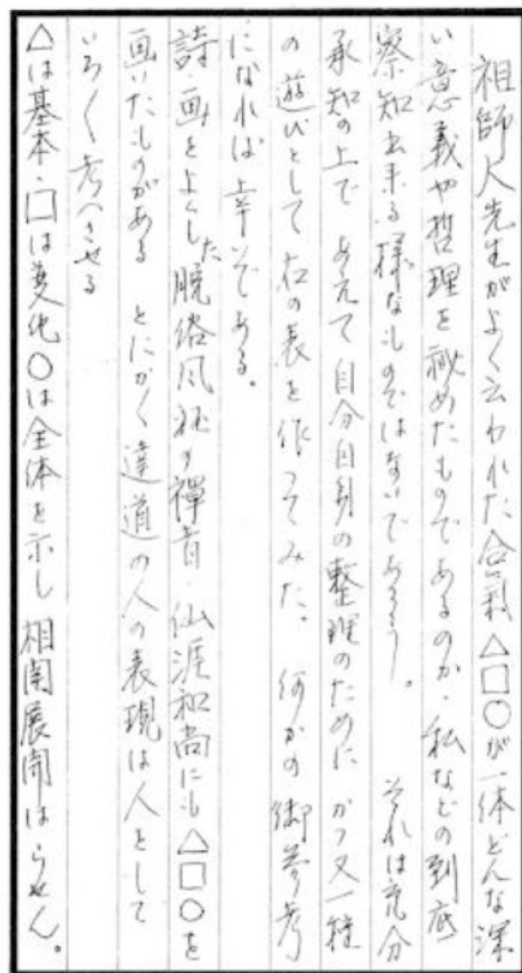
山口清吾先生の手書きの大学ノートと△□○と開祖のお話から惟神武産などの相関について山口先生がまとめられた表だそうです。

早くも英語に翻訳され表を Web で紹介されておられますが、実は私は興味深くおもうものの未だ余り理解できていません。さらに言えば、原文がどのような機会で書かれたものなのか Li 先生もよくわからないようです。 <http://kogenbudo.org/a-small-contribution-about-the-late-seigo-yamaguchi-sensei-1924-1996-by-nick-kraus-1942-2011/>

御時間のあるときで構いません。

何か日本語で資料がありましたら、教えて頂ければ幸いです。

よろしくおねがいします。



「祖師大先生がよく云われた合気△□○が一体どんな深い意義や哲理を秘めたものであるのか、私などの到底察知出来る様なものではないであろう。それは充分承知の上で、あえて自分自身の整理のために、かつ又一種の遊びとして右の表を作ってみた。何かの御参考になれば幸いである。

詩画をよくした脱俗風狂の禪者 仙涯和尚にも△□○を画いたものがある。とにかく達道の人の表現は人としていろいろ考へさせる。

△は基本、□は変化 ○は全体を示し、相関展開はらせん。」（山口清吾師範のノート）



合気道大観 (△□○) 対応相関展開図表

気 →

至誠 理 (真) 解凝分合 陰陽

|

道 (悟) 惟神武産 創造

|

稽古 法 (相) 相補和合 柔剛活殺

|

形 (体) 入身轉換 体捌变化

|

鍛錬 技 (名) 坐半立立 固・投 表裏 前後左右・導

|

業 (証) 体剣・槍 展開

|

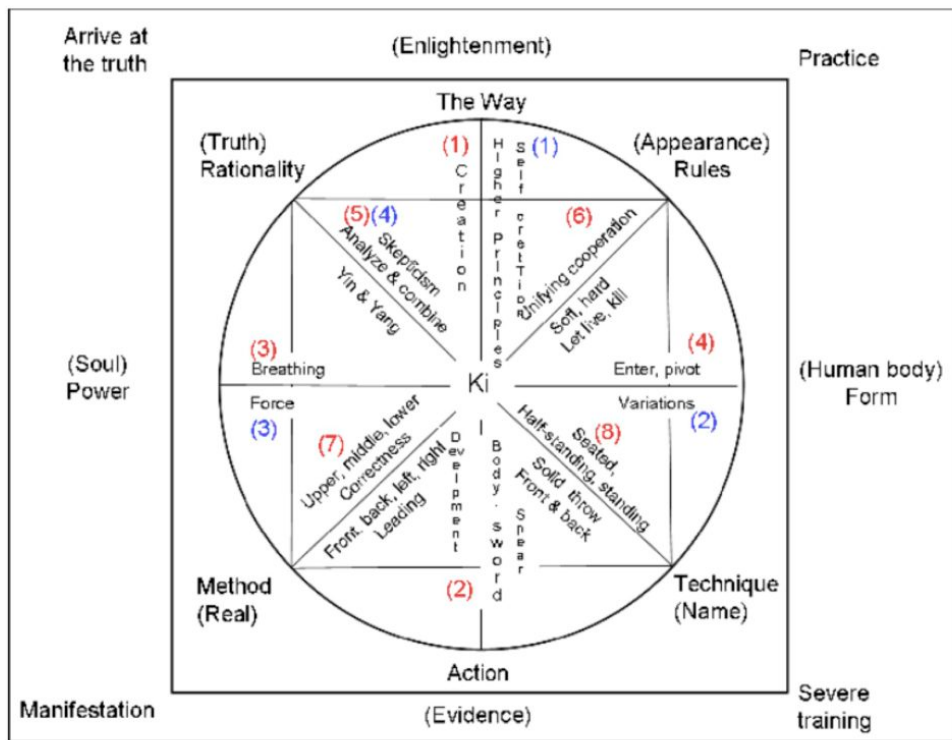
顕現 術 (実) 上中下・当

|

勢 (魂) 呼吸 力 働き

|

至誠 理 (真) 解凝分合 陰陽



Christopher Li 先生の英訳

回答：

この山口清吾先生のノートと△□○の考察図は開祖の没後（1969 年以降）に書かれたものです。それは「大先生」と呼ばれているところから分かります。開祖を生前は「翁先生」とお呼びしていて、没後、「大先生」に変わりましたので、間違いのないところです。

直弟子であられた山口先生が「私などの到底察知出来る様なものではない」と言われていることなので、開祖の講和の時には、山口先生にも「それはどんな意味ですか？」という質問が出来なかったようです。

「△○□が一体化して



となり、それが気の流れとともに円転してスミキルのが合気道じゃ。」

という言葉も残されているので、山口先生が□の中に○を入れて考察されているようです。しかし、△が入っていないので（○の中に△が 8 つありますが）、開祖の original があった訳ではなく、あくまでも山口先生が考察された展開図だと思います。

△○□については、『合気道講習会用テキスト』に次のように載っています。このことは開祖もお話されたようで、増田誠寿郎先生からは「△に構えて、○く捌き、□におさめる」と聞いています。

<http://nippon.zaidan.info/seikabutsu/1996/00224/mokuji.htm>

§ 1. 日本武道の理想（和の武道） <http://nippon.zaidan.info/seikabutsu/1996/00224/contents/006.htm>

※合気道稽古上の三要素

- (1) 正しい心構え、姿勢（心直体正）
- (2) 正しい体捌き法（入身一足、円転の理）
- (3) 正しい技法（健全な心身と自然との一致）

△ 三角に入身して（入身一足）

○ 丸く捌いて（円転の理）

□ 四角におさめる（修理固成）

※この三要素から、全ての技と心を統一帰納しているのが「合気」と呼ばれる原理である。

このテキストの△○□は、奥村繁信先生が「戦後開祖の説いた「もちろんの法則」△（入身一足の理）○（円転の理）□（固成の理）」も鬼一法眼より来ています。日本武道の理想的勝負像である牛若丸と弁慶の如く、合気道家も相手と衝突せず擦れ違い、躲し、合い抜けて、殺傷せず生け捕る技を体現せねば成りません。」（『合気道探究』4号 p.53）と説明されていることと一致しています。

ただし、これは鬼一法眼（きいちほうげん。『義経記』では、京の一条堀川に住む陰陽師）ではなく、中西光雲・清雲夫妻（神示）からのようです。

中西夫妻が設立した「ことたま研究所」から出ている本『「ことたま」に依る 十種太祓（布留部祓）の解明』に次のように載っています。註と注解は私が付けました。

「**もちろん** 「もちろん」とは、「真理・原理・道理」、「気体・液体・固体」、「使命・生命・宿命」、「魂・命・霊」、「頭・胸・腹」等の如く、三種（みくさ）を図鑑に表はしたもの、即ち△○□（もちろん）の事であり、淤能碁呂島（おのごろじま） 森羅万象万有の造化の元素原理より、生成発展の体用まで一切凡てが、この「もちろん」に包含されるものなのである。

神道に於ては、ひふみ祝詞（のりと）に「もちろん」という詞があり（註 ひふみ よいむなや こと**もちろ**らね…）、仏教に於ては形として取入れ、譬へば位のあった人の墓などに、其の人が生前人間として為すべき、最高最善を仕尽上げたと云ふ意味を表徴して、△○□の形 所謂「もちろん」の墓（註 墓塔の五輪塔、空風火水地輪の内 火輪(△)水輪(○)地輪(□)の形）を建立して居る様である。然し現在迄神道にせよ、仏教にせよ何れも其の意味の解らぬ儘に、宣（のり）上げたり象（かたどり）を伝承して来たに過ぎない（註 戦後、中西光雲・清雲が神示によって「もちろん」の意を明らかにした。）。

一切万有の造化生出は、気体より液体・液体より固体に、真理・原理・道理に基いて行はれ又死滅は其の反対の順序を以て執行はれる。例へば H_2O に依て表はされる水も、水蒸気と云ふ気体から液体の水となり、この液体の自ら氷と云ふ固体になる。又氷が変化するときも、之の逆の順序に従つて行はるる如く、本体は一つであるが時に従ひ巡りに合はせて、経巡りつゝ体・用を変化してゆく、其の造化の元素原理の象（かたどり）を云ふ。又此際厳密に言ふなれば、この気体も更に気体・液体・固体に、液体も気体・液体・固体に、固体も亦気体・液体・固体に分れる事となる。従つて少くも現代の人文科学は液体迄の科学であつて、気体の科学は神霊化学に属すると云ふ事になる。

大神はこの「もちろん」を三種の神器として物の具に象徴された。即ち△一劔・○一玉・□一鏡である。そして是を以て人文々化の向上発展の土台と様に示された。何処の神社に於ても神前に三種の神器を奉置して居る所以である。」

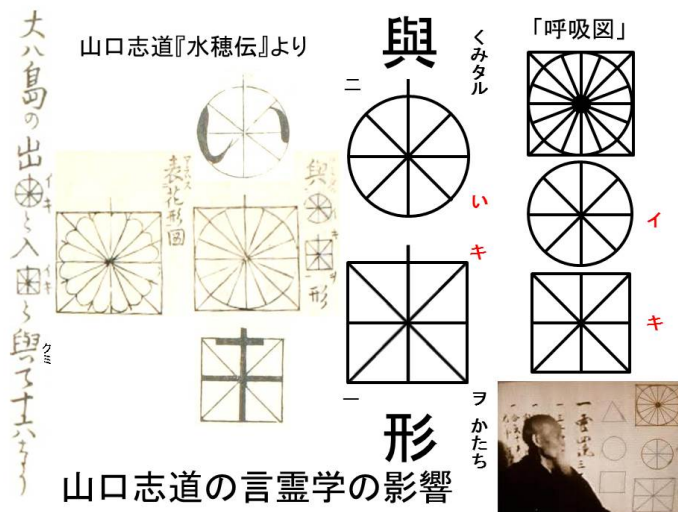
注解 「もちろん」の形象（図鑑）は△○□（○△□など順序に関わらず）で、この形象全体が「もちろん」です。したがって、△が「も」・○が「ち」・□が「ろ」というような読み方はしません。ひふみ祝詞の「もちろん」ですから、天（あめ）の数歌（『霊界物語』73-1-10）の「もも・ち・よろず（百千万）」のことです。

仙厓和尚の○△□の画が意味するように△○□は森羅万象（よろずのもの、あらゆるもの）を表す基本図形であり（出光佐三氏はこの画に Universe(宇宙)と名付けている）、また、開祖によると合気道の体（本体）と用（働き）を表す形象です。



△○□ 扶桑最初禅窟 仙厓（出光美術館蔵）

体というのは△○□で順にアイキと読み、△○□（アイキ）が宇宙そのもの、宇宙と一体となった武道、○（イ）□（キ）即ち気や呼吸を表していて、気（イキ）の力、呼吸力を用いる合気道そのものや合気道の根本的な理法を表すとしているからです。



写真は映画『合気道の王座』より

用とは「三角体の構え、入身・転換、固め（and/or 投げ）」という合気道の技法を表すからです。

開祖は、昭和 20 年（戦後）の白い幽体との稽古の後、「武道の奥義も宗教と一つなのであると知って法悦の涙にむせんで泣いた。」と話されています。

この宗教（の教え）というものの一つが神示による「もちろん（詞）、△○□（形）、三元」だと思います。

「それが七年前（昭和 25 年のことか？）、真の合気の道を体得し、『よし、この合気をもって地上天国を作ろう』と思い立ったのです。」とされているように、開祖は、岩間で宗教の教え又は宇宙の真理とご自身の合気道の理合・技法とを繋げる思索をされた結果（あるいは神示を受けられたか）、△○□を真の合気の道の（体と用両面の）中心的な概念として確立されました。

「天の浮橋は、水（身、み、体）火（霊、ひ、心）と結んでめぐるといこと。火（心）は水（体）を動かし、水は火によって動かさる。水も火も一つのものである。螺旋状にめぐる。気をもって絡むのである。それは、息（註 水火をイキ、気もイキと読む）によるものであり、この息が合気である。」や、『アオウエイ』を口より鳴り出させる形式と造化の御力徳、右に螺旋して舞い昇りたまひ、左に螺旋して舞い降りたまふ御行為により、水火の精台（註 天の浮橋）の生ずる摩擦連行の、様相根元をなし、

無量無辺の音声、万有一切は成立するということであります。」、

「こうして合気妙用の導きに達すると、御造化の御徳を得、呼吸が右に螺旋して舞い昇り、左に螺旋して舞い降り、水火の結びを生ずる、摩擦連行作用を生ずる。」も、

「それが気の流れとともに円転してスミキルのが合気道じゃ」と同じことを言っておられると思います。その意味で山口先生が「相関展開はらせん」と言われているのか、この展開図を spiral に眺めることを言われているのか、掲載されているノートだけでは分かりません。

この展開図は山口先生が「あえて自分自身の整理のために、かつ又一種の遊びとして」作られたもので、私たちの参考にはなりますが、開祖の手になる同じような概念図 (original) があったということではないと思います。即ち、山口先生が開祖から学ばれた合気道の諸要素を△○□に関連付けてまとめられたもので、私の知る限り、その原図は存在しません。

「惟神（かむながら、かんながら）武産」は一つの熟語として見るのは初めてです。「惟神合気…」という言葉は道歌にあり、「惟神」を「合気」にかかる枕詞のように使われています。意味は「神の御心（万有愛護の大精神）のままの」や「神の条理（宇宙の真理）のままの」ということです。

惟神の道は神道のことですが、出口王仁三郎聖師は、惟神を次のように説明しています。

「惟神という事は、天地の真象に倣（なら）うという事である。また、大自然、あるいは真理のままという事である。」（『水鏡』→「惟神」）

「すべて人間は常に心を平静に持ち、愛善の誠を以て人の幸運を祈り、悲しかった事や、くやしかった事は全然忘れてしまい、楽しかりし事をのみ思い出し、世界人類に対して、誠をさえ、つくして居ればそれで良いのである。これが惟神の心である、人生の努めである。」（『月鏡』→「惟神の心」）

「魂は遠心的のものであるから、外へ出さねばならぬ。内へ引っ込めるから狭い胸がなお苦しくなって来るのである。魂は決して傷つけてはならぬ。いろんな事件が起こったら、雨や風が吹き荒んで居るのだと考えたらよい。魂を自由の境地において活動するのが、惟神である。」（『水鏡』→「魂は外へ出さねばならぬ」）

開祖の教えは、同じことをいくつかの違った言葉で表現されているので、私達もそれを合気道の技や理合にすると何だろうかということを絶えず考えて相関展開図を作ったり、その根底のものを抽出して技に表して行くことが大切なのではないかと考えています。

特に、稽古で鍛錬するためには、根底となるもの（核心、理合）は何かという思索を繰り返し、得られたものを数々の技の中で生かすということがとても大切なことだと思います。

開祖は、感性の高い方で、弟子たちの気持ちにも敏感であったと思います。それで、この核心について弟子に合わせて手を変え品を変えて教えられ、「分かるか？」という質問を寄せられたと思います。

例えば、弟子が「翁先生、今の技はどうされたのですか？」と質問すると、「つまり、こうじゃ。」と言って違った技で同じ理合（核心）を説明されたのだと思います。

生憎、弟子の方は、技を盗まれないために同じ技を繰り返されないのだ、と受け取ったようで、分からなくても「はい。」と答えたようです。「分かりません。」と答えると叱られるのは、同じこと（理合）を繰り返し繰り返し教えているのにどうして何時までも気付かないのだ、君たち直弟子が理解しないで後進にどう伝えて行くのか、といったことであつたかと思います。

「武産」はその核心で、Wikipedia「合気道」には斉藤守弘先生の定義「無限なる技を産み出す合気」

が引用されていますが、武産合気の神示からは「いくらでも機に応じて型が形に添って結び生じる、これが魂の武産である。自在の生みの気を結ぶことが肝要ぞ。」と産み出すよりも結ぶことが強調されています。

次のことから「武産（たけむす）」は「さむはら」と同じ意味ではないかと思います。

<http://archive.li/fyAk5>

「故・九鬼隆治公は、生前、「九鬼武産」の4文字で“さむはら”と読み、単に「武産」の2字では“たけむす”という一との談を残しており（高塚勲直く九鬼神流（くかみ しんりゅう）第二十代師範家＞聴取）、これについては異論もあるように思われるが、ここでは、敢えて後考のために記しておきたい。」

阿部醒石先生も、「武産合気』と書いて「さむはら」と読ませた、と伝えられています。

そうすると前記の本『「ことたま」に依る 十種太祓（布留部祓）の解明』に書かれている「さむはら」の意味（言霊による解明、言霊解）が「武産」のことを示していることが分かると思います。

さむはら 「さむ」一開いて結ぶ、「はら」一孕（はら）んで結ぶ意。大自然を土台として、夫々の因と果に成り表はれる武の働きを謂ふ。

万有ならば、天地人の理合を先ず第一に知り（仏のことを天地人の“調合師”と謂ふ）この三玄（さんげん）の和に結びて科学する業（わざ）・力を云ふ（註 三玄：三つの奥深い道理、三元：三つの根本）。電気を孕んだ雷が、電光石火の早業を以て偉大なる働きをする。是自然の気の「さむはら」である。又一粒の草種が季の節に合せて芽を出し、茎に応じて丈夫に根を張り、巡りに合はせて花を開き実を稔らせる。是を「さむはら」の武と云ふ。

合気道の技では「孕（はら）んで結ぶ」が相手を腹中に吸収すること、そして「開いて結ぶ」が相手と一体となって無限大の宇宙そのものとなって動くことで、合気道の「結び」を示している言葉になります。呼吸力という言葉は、この「開いて結ぶ（呼）」、「孕（はら）んで結ぶ（吸）」ということから作られた言葉ではないかと思います。

相手を腹中に吸収する時にイメージが大切ですが、自分の正中軸が「落ちた！」と想うことで不随意筋のコアマッスルを動かし、それからアウトマッスル（随意筋）が動いて足捌きや手が動くことになるという順序で技を施せば良いと思います。

相手が攻撃を仕掛けて来る時に気が右に螺旋して舞い昇り、それを愛の気で受け入れる時に左に螺旋して舞い降り（正中軸が落ち）、結び（摩擦連行作用）を生じるのだと思います。

そうすると「惟神武産」は「創造（産み出し）」のことになり、この言葉の意味が分かります。

「気」というものを中心（核心、根底）とすると稽古の時にどのように鍛錬したら良いか分からなくなるので、私は「結び（産び）」を中心に置いて稽古をしたら良いと思います。その結びは、手と手が触れることによって結ばれるのではなく、腹中に吸収することによって結ばれると理解したいと思います。

山口先生の相関展開図の中心を「結び」とすると開祖の合気道を説明したものになると思います。